空襲で赤ん坊が

酉水　雄一

（東京の空襲の大半を）

私は戦時中、品川区戸越と大田区上池台に住んでいました。五反田から当時の都電の四番で麻布中学に通学し、中学二年の夏が終戦です。東京の空爆は、ほとんど体験しております。身近で爆弾の空襲を受けたのが二回、それから焼夷弾による空襲体験が三回です。

当時、私たちは被災して、馬込と反対側の斜面にある上池台の祖父の家におりました。ある日、爆弾が谷の向こう側の斜面に、二十ヶ所か三十ヶ所落ちたんです。それで、爆風が来たんですね。壁が爆弾の破片で、蜂の巣状態になりましたよ。玄関は洋間式で、厚い壁で仕切られておりましたが、爆弾の破片が家をぶち抜いて壁まで来ましたね。たまたま私の母が、病気で玄関の次の部屋に布団を敷いて寝ていたので、幸い誰も怪我人はありませんでした。戸越に住んでいた頃、私は中学生で、警戒警報による途中下校となり、家に戻る途中で、ちょうど池上線の桐ヶ谷駅に爆弾が落ちて、燃えている最中でした。駅の直ぐ脇を、剣道の道具を持って歩いていました。後で気づいたのですが、どこかで剣道の道具を落として失くしていました。もう初めてのことで、とてもびっくりしていました。

多分、東京が爆撃された最後の空襲だったと記憶しています。上池台の家の近所の海軍士官か見習士官かしている方で、休暇で来ていた方と二人で、防空壕に荷物を入れている時に爆弾が来たものですから、「伏せろー」って庭に伏せました。終わってみたら、ギザギザの小さい破片から、大きい破片がいっぱいです。ああいう時の生死は運ですよね。桐ケ谷駅が爆弾を受けた空襲の時、直撃弾を受けた家の赤ん坊が、庭の大きな梨の木に引っ掛かっていたんです。その子は下から見た感じでは、気を失って引っ掛かっているのではとみなで言っていたのですが、おろしてみると背中はぐしゃぐしゃでした。そしてその子の母親は、百メートルはなれた近所の家のトタン屋根をぶち抜いて、更に天井もぶち抜いて、畳の部屋まで落ちていました。その家の人は、誰かが屋根を壊して肉の塊を投げ込んだのではと思ったそうです。

私の一年後輩の両親と妹さんが、床下の防空壕で家がつぶされ生き埋めになりました。それをみんなで掘り出し、死なずに助かったということもありましたね。

一番怖かったのは、終戦直前の艦載機による機関銃掃射ですね。その時は、恐くて外に出られないで、家の中の狭い廊下にへばりついていました。あれが一番恐かったですよね。

（勝つとは思っていなかった）

中学生となれば当時は戦力なので、強制疎開の家の引き倒しですとか、それから焼跡の整理等に学校から動員で行きました。学校には麻布の三連隊から一分隊程の兵隊が来て構内に駐屯していました。講堂が宿舎で、冬の間に講堂にある机等は兵隊が焚き火の材料に燃やされてしまいました。また学校では戦時体制下の教育や軍事教練もありました。連隊から配属将校が毎朝馬に乗って来て、生徒の敬礼をやかましく言ったりしておりました。

印象に残っているのは、私の一年の時の担任の先生が、四十才半ばで召集され、校庭での壮行会の時です。周りに軍関係者が大勢いるのに、泣きながら、「私はね子どもの教育に自分の一生をかけてきた。それがこの年になってこんな訳の分からない戦争に行くのはつくづく残念です」と言ったのです。当時としては信じ難いくらい勇気のある発言だったと思いますね。そのことと、戦時中を通じて敵国の英語の授業をやめなかったことが、麻布中学の思い出ですね。

終戦の年、中学二年生の時でしたがほとんどの中学生は日本は勝つはずがないということを感じておりました。敵のスポーツで禁止されていた野球のボールを持ちながら「戦争終わったら絶対に野球は復活するからな、そしたら一緒に野球をやろう」と友だちとそんな話をしていました。私たちは戦争でも洗脳されてはいなかったと思いますね。

（かぼちゃは苦手）

私の家でも、多摩川の河川敷を借りまして、麦を作っていました。リヤカーを引いて収穫に行きました。そして、麦を脱穀して、粉に挽いてパンを作って食べました。そうですね、丸一年は、米を食べた記憶はないです。終戦直後は、カボチャをつくったり、ジャガイモを作ったりしました。カボチャは人が一生食べる分を食べた思いです。多分六十才ぐらいまで、カボチャは食べる気がしなかったですよ（笑）。終戦は、「やっと終わった、よかった」という気持ちでした。

（平和への思い）

戦争はやるべきじゃないし、また現代では、もし本気になってやった場合には、核兵器の戦争になる危険性が高いですよ。当面そんな世界をぶち壊すような戦争は起こるはずがな

いと感じていますが、じゃあどうやって平和を守るかということになると、国家利害とエゴを自制して、今の国連の機能を、よっぽどみんなが尊重してサポートしない限りは、本当の世界平和は出来ないんじゃないかと思います。今、平和ですよ、平和ですけど、平和ボケの状態ですね。

港区　レプリカ

第二部（インタビュー・空襲）

川崎周辺は一面焼け野原

角　一郎

（東京大空襲も見えた）

京浜工業地帯でしたから、いやあ、大変な空襲だったですよ、毎日のように、朝昼晩に艦載機とかB29が来ましてひどい空襲でした。一面、焼け野原ですね。三月十日の東京大空襲も、川崎から見えましたよ。もの凄い、燃え方だったですよね。昭和十九年に、学徒の勤労動員で一年ほど、工場で働きました。

港区　レプリカ

第二部（インタビュー・空襲）

仙台で、家族八人が犠牲に

中鉢　昌

（東京から疎開して被災）

三月十日の大空襲に父が驚き祖母、母、妹二人、弟三人、私の八人で二十年の四月仙台に疎開しました。父の妹が養女に行った先で、私の祖母の妹の家です。二人で大きな家に住んでいると兵隊さんに接収される恐れがあったので「どうせ疎開するなら、来てくれ」というので行くことになったのです。大変でしたよ。切符もなかなか買えない状況で、家の裏に新橋の駅長さんがいらして、お願いして一度に全員の分は買えないから少しだけ買ってもらい、残りの分を長女の私が新橋駅に夜中から並んで買うことになったのです。並んでいる途中で空襲があってね、まだ十五才になったばかりで子供ですから、どこへ逃げたものやら右往左往しながら、なんとか切符を買って帰りました。列車はほんとに満員電車でした。疎開先で十人家族になりましたが、その中で生き残ったのは私と妹だけです。あとの八人、全員が仙台の空襲で焼け死んだのです。

（仙台空襲の悲劇）

七月十日、焼夷弾が回りに落ちて、皆で裏の二高（今の東北大学）の寮の防空壕に逃げたのです。母親が一番下の赤ちゃんを連れました。私は三歳の妹をおぶって家族十人分の水につけたタオルを持って来ようと思いお風呂場に向かいました。その途中、廊下で来年小学校にいく上の妹が火を見てブルブルと震えていたのです。もう一人で歩けましたから「早く逃げなさい」「早く防空壕へ入りなさい」といって風呂場へ行ったのです。背中に下の妹をおぶっていて、右手でぬれタオルを抱えるので精一杯でした。その後妹の消息は分からなくなりました。私は未だに後悔してね、どうして、私、あの子を連れて逃げなかったのかと思うと……。

そして、家の裏の防空壕の入口の一番近くに入ろうと思ったら、入口までいっぱいでした。家の家族は見えません。それで、自分と背中の妹の分として大きいバスタオルをとって、あとの残りを「これで口をふさぎなさい」って、ポンと投げ入れてあげたんですよ。それでもいくつかある壕のなるべく真中の壕をみはからって、妹と二人で入りました。入り口から目の前にある寮がメラメラ燃えているのが見え、壕の中にも火の粉（こ）がボンボン入ってくるので、妹の着物に火が付くのです。それをぬれタオルでもみ消したりしながら、また入口の木の枠にも火が付くのでそれももみ消しながら、火

が落ち着くまでなんとか頑張っていました。でも、熱くて外には一歩も出られません。それで、じっとしていたわけです。

（焼け野原の仙台）

火が鎮まっても、すぐ出られないのです。熱くて。やっとなんとか外へ出たら、一面焼け野原でしょう。人影がなく一面焼け野原で、仙台市内で生き残ったのは、私と妹と二人きりだと思ったくらいです。これから先どうしようかと思いましたね。そしたらしばらくして、あっちからぽちぽち、こっちからぽちぽちと、壕に入っていたのでしょうね、人が出て来たんです。〝ああ私だけじゃないな〟と思って、妹を連れて仙台駅へ行こうと思いました。

前後関係をはっきりは覚えてはいないのですが、壕を出て周りを見たら、隣の壕で誰か人がうめいていました。それが疎開先の家主の叔母だったの。すごく美人の叔母でしたが、焼けただれてお岩さんのようになっていました。叔母さんは苦しくて声が出ないの。あまり苦しいので死にたいと、水銀を飲んだとのこと。体温計の。救急カバンにみんな持っていたわけですね。持って出る余裕はあったわけ、家の中はまだ燃えてないので、家の中で右往左往したわけです。叔母はおばあちゃんを連れて逃げようと思ったんだけど中風で半身が少し不随で「これじゃ逃げられないから、いいからあんたたち逃げなさい、若い人だから」って茶の間の火鉢から動かなかったそうです。叔母の入った防空壕を一緒に入った人たちの家族の男性たちが、入口に畳で蓋をして水をたくさんかけて逃げたそうです。そのうち、熱くて苦しくてとてもいられなくて、飛び出して隣の壕に移ったそうですが、隣の壕に移動する間に大火傷をしたんじゃないかと思います。兵隊さんたちが病院へ連れて行ってくれました。その時の話は叔母が病院に入ってからポツポツ聞きました。

（裸足の妹と被災地を）

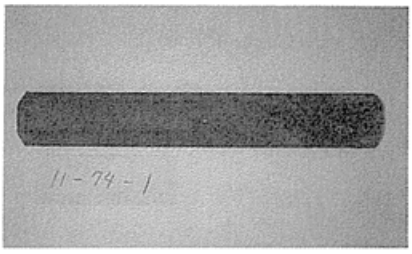
私と妹は、仙台から少し離れた所に、東京の浅草からきた親戚がいるので、そこへ行こうと仙台駅に向かって妹の手を引いて歩き出しました。私は足袋だけ、妹は裸足で、繁華街を歩いていました。人が未だぷすぷすと燃えていました。手足は燃えても体は燃えないんです。そういうのがいっぱいありました。また、馬が足を上に向けて焼け死んでいるものもありました。兵隊さんが来て片づけをしているのを見ながら二人で仙台駅まで歩こうとしていました。途中で大人の人が「どこまで行くの」って言うから、「仙台駅で汽車に乗る」と言うと、仙台駅は汽車は通らないからと教えてくれました。「落合へ行く」って言ったら、「それじゃ仙台駅ではなく北仙台へ行けば乗れると思うから、北仙台へ行きなさい」って。

わらじみたいな草履を妹にくれたのです。それを妹に履かせて、途中、前に一回買出しに行った農家のおばさんの知り合いがいたので訪ねて行くと「よく来た、よく来た」って、トマトやなんか食べさせてくれて、道を教えてもらったりしました。途中で県庁に行くと乾パンが配布されると聞いたので、寄ってから北仙台までずっと歩いて行きました。貨物列車が来ていっぱい人が乗っていたのですがうまく乗せてもらって落合で降りたのです。駅に降りましたら、農家の人たちの炊き出しが出ていて、おにぎりや水がありました。それから私は親戚の家まで行きました。父親の従姉が娘と一緒に来ていました。その従姉は途中で私の家に寄ると、私の家族たちはみんな体は何でもなく顔だけ少しむくんで窒息死して、そのまんま防空壕の上に並べてあったと教えてくれたのです。衣服も焼けないで、そのまま眠っているようだったとのこと。また明日行こうと言ってくれました。次の日に途中で牛車に乗せてもらったり歩いたりして、仙台へ戻ったんです。もう防空壕の上には遺体はありませんでした。叔母が大学病院に入ったので訪ねて行きました。病院はベットがいっぱいで、軽い火傷とか怪我をした人が廊下にまであふれていました。一日二日で、軽い人はどんどん返されたし、重症の人は、どんどん死んじゃうわけ。それで、部屋が二、三日で空いてくるわけ。叔母は重症で、凄い火傷のため畳のある個室の部屋に入っていました。叔母さんの所には、先生が特別に来てくれていました。私たちは行くところもないのでそこに寝泊りすることになったのです。少しして、父が東京から、来てくれました。私たちが仙台に四月十日に疎開し、五月に東京も焼けたあとで、当時父は海軍の軍属でしたが、事情を話して仙台の方に来てくれたのです。私と妹と父は病室で暮らしていました。でも、叔母が八月七日に亡くなったものですから、病室から出なければならなくなったのです。叔母の知り合いの紹介で家を借り、父と三人の生活が始まりました。それからは、空襲警報が鳴っても、「もういい、ここで死んでもいいから、防空壕へ行くのはよそう」といってその家で暮らしていたのです。

（終戦の喜び）

そして、終戦の日、父親が買出から戻ると、「昌、戦争終わったぞ」と言って喜んで玄関の戸をあけました。「よかったね」って言って喜びあいました。終戦になったので海軍の所に置いてある父の私物や自転車を取りに父が東京に戻ったら、もう何もなかったそうです。私たちは父が生きていたからいいけど、もし生きていなければ妹と二人で浮浪児ですね。しばらくして、軍人だった叔父が仙台へ来て、「茶の間の火鉢この辺だ」と言って、焼け跡を掘り返しました。そうしたら、ち

ゃんと、おばあちゃんの遺体が出てきました。手足は全部焼けていましたけど、胴体と頭だけ焼けぼっくいになって、残っていました。それで、叔父が「戦地では、こういう風にやるんだよ」って木をあっちこっちから拾い集め、やぐらを組んで、おばあちゃんを乗せ皆で火葬にしました。そして焼けた葬儀屋さんの店の骨壷を拾ってきて、骨を入れ東京の墓に収めましたよ。他の家族は、共同墓地に入ったと聞き、行って探すと、弟のカバンだけは見つけることができました。その他はわかりません。それで、お墓には遺品を入れました。その後、ずっと仙台に住んでいて戦後苦労しました。父は東京の店も焼け私物も全部なくなり、もし妹と私も死んでいたら、坊さんになっていただろうと言っていました。



東京都

第二部（インタビュー・空襲）

戦争だけは二度と嫌

塚田　稔子

（防空壕でお産）

私は、父親が鶴見の東芝の軍需工場で働いて鶴見にいる時に、空襲に遭いました。もうほんと怖くて、夢中になって逃げました。花月園の下の所で伏せていたら、低空で、ドドドドーって来ました。「伏せしろ、伏せしろ」といわれ伏せたけれど、あの怖さ、忘れられないわ。あちこちで、唸っている人ばかりでしたね。機銃掃射が来て撃たれ、手に弾が入ってしまいました。花月園で弾を取ってあげますって言われましたが、「嫌だ」って、「田舎に行きたい」って新潟まで逃げたくらいだから（笑）。本当、あの思いは怖いわね。夫の友達で、焼け出されて私の家から会社に通っていた方なのだけど、逃げるのが精一杯だったのでしょう、ちょうど掘ってある防空壕に、入った時に爆弾が落ちて、埋まったまま死んでしまいました。その爆風というのを私は見ていたから、もうほんとに嫌で。火葬場も満員だから、空襲で壊れた家の木で燃やしてくれって言うわけ。もう嫌、もうほんとに怖い思いだった。

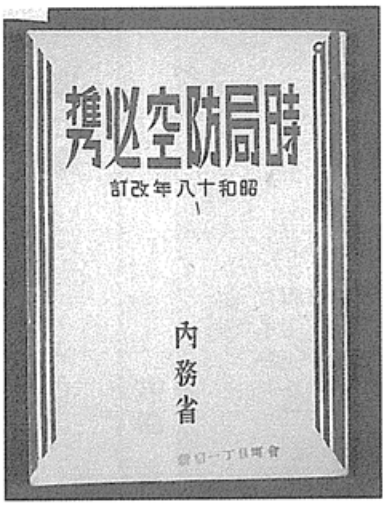
防空壕の中にいて爆風でずいぶん大勢亡くなりましたよ。生麦には山があったから、私たちは山の斜面に穴を掘って防空壕を作りました。そして空襲警報のたびに荷物を持って逃げました。もう解除、また空襲。行ったり来たり。近所のお腹の大きい奥さんは、生まれる時大変だからと防空壕に入って子どもを産みましたね。もう、終戦になって本当にほっとしましたよ（笑）。

食べ物はほとんど配給だからね。隣組で五軒いれば、お大根を五つに切って食べましたよ。買い出しに行って、野菜を買って来たら、おまわりさんに取られたことが一回あります。警察の一斉があるって、それを近所の方は分かっているらしいんだけど、重たい思いして背負って来て没収ですからね。酷いですよ。癪に触るわね、高いお金で買って来て、電車の中でまた取られちゃうのですから。

（お塩が貴重品）

終戦の時、私は東芝のタービン工場に勤めていました。軍需品とかアルミニウムの塊を、皆で終戦直前に海に落としました。戦後落ち着いてから会社で引き上げて、私たちにお釜を作って下さったの。それが嬉しかったわよ。それを使ってお塩をこしらえたのよ。そして農家へ持って行くとね、お塩が無いから交換で何でも分けてくださった。お塩は貴重品でしたよ。

原爆のことを思うと、ほんとにお気の毒ね。私一番そう思うわ、本当にもう、戦争だけはやりたくない、してはいけないと思います。



昭和館

第二部（インタビュー・空襲）

空腹で、ホームで倒れる

匿名希望

（自宅が全焼）

焼夷弾が雨のように降ってきた経験があります。防空頭巾を皆被っていました。それぞれ気が付いた物を持って逃げました。鶏（ニワトリ）を抱く人、柱時計、煙管を持った人。私は敷布団を三つ折りにして背負いました。十三才、東京渋谷区幡ヶ谷でした。

空襲が終わり避難していた中学から戻ると、家はありません。全焼でした。中野区の親戚にしばらく世話になり、学校に通いました。

食べ物はなかったですね。とても空腹でした。学校の帰りに、新宿駅で電車（中央線）の風圧に飛ばされ、駅の柱にしがみついて倒れたくらいですから。口に入る物といえば〝おかゆ〟って言えるのかな？　水みたいな雑炊の記憶があります。

第二部（インタビュー・空襲）

兵庫県尼崎市で見た地獄

西尾　あや

（京都から尼崎へ）

昭和二十年の五月十日、国から召集令状が来まして、兵庫県の尼崎市で女子挺身隊として十七歳の時徴用されました。仕事は二交代で、紡績工場（慰問袋を作っていた、大阪制麻株式会社）みたいでした。

終戦のその日に、爆撃と機銃掃射に合いました。それまでも、何回も爆撃は来ていましたけど、逃げて助かっていました。ところが、終戦のその日に酷い空襲でした。始めは機銃掃射、そのうち焼夷弾も落ちて来ました。あまりの恐ろしさに、パニックになって、友達と五人くらいで手を繋いで走ったら、後ろから兵隊さんに背中を押されて倒れ「お前ら駄目だ動くな、立っていたら殺されるんだ」って言われました。もう無茶苦茶でした。煙突の中にいるみたいで、しばらく気を失っていたみたいで、気がつくとまわりは火の海で田んぼの中のようでした。田んぼの土が燃えているんですよねえ。焼夷弾の油が燃えているんです。手を繋いで走った人が名前を呼んで、立ち上がらなかったことがずうっと頭に残ってい

ます。煙で前がみえません。煙突の中だと思ってもらったらいいです。友達の名前を呼んだけど駄目で、こちらも呼吸が苦しくなって、そこから走って煙の外へ出たんです。その日はいいお天気でした。嘘みたいな天気です。それでまた、機銃掃射が来たのでじっと我慢したら、風上でね全然火も煙も寄ってこないの。そのかわり機銃掃射でばんばんばんばんって。それがもうすごく下へ降りてきてね。見たら、黒人が三人乗っているんですよ。私は「動くな」って兵隊さんに言われましたから、目だけ動かしていたら、敵の飛行機の操縦士と目が合ったようでした。これはいけないと思って、伏せましたくらいですから相当低空飛行です。

子どもに向かってばりばりっと撃ったら、今まで走っていた子どもがいない。子どもが死んじゃったかどうかは、知りません。倒れた形跡もないのです。飛んでしまったというか。それを見ていたら、私の兄弟もまだ幼かったので、弟がその子と重なって、武器があったら私もアメリカの飛行機を撃とうと思いましたよ、本当に。それはもう人に言えないくらいその時の葛藤——。それは言えないですよ。終戦になっても、黒人を見たら殺してやろうかなって思ったくらいです。憎しみがありました。

（川が死体で埋まる）

それから、私は着の身着のまま、裸足で何にも持たずに、大阪と神戸の間にある川まで逃げました。お天気がいいし、飛行機の音も聞こえないからトコトコ歩いて行ったら、死んだ人が流れて来るのです。誰かが南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と唱えていました。未だに、耳の奥にその声が残っていますよね。焼夷弾が、肩にかけた袋に引っ掛かって炎で助けを求めていた人も見ました。女の人にあたって「助けてくれぇ」といって、ドラム缶に入ったら、それごと炎に包まれました。それと、韓国人の人が「アイゴー、アイゴー（朝鮮語の感嘆詞）」って言っているんですよね。帯で赤ちゃんをおんぶして、赤ちゃんは、外向けに首を垂れていました。おそらく、死んでいたと思います。八メートルくらいの川が、全然水が見えないんです。死んだ人でいっぱいで。それがどんどん流れてくる。空襲がまた激しくなったので、土手のガード下に入っていました。そこから出ようかなと思ったら爆弾を落として行くのです。私は、もう死んでもいいやって思いトンネルの入り口の方に行って手を合わせながら立っていました。次から次へと爆弾が落とされて、砂埃に身体がはまっちゃって、出るのが大変でした。砂と小石が当たって、血が出てきます。痛いというより、もう何もかも分からないですよ、それから外へ出て歩いていると、夕方になってきました。線路があり

京都の方向を聞いて歩きました。私が生き残ったのは、あの友達が生かしてくれたんだと思います。語りつがなければと思います。

（私が戦争に言いたいこと）

本当に、罪の無い人がどうしてあんなに死ななければいけなかったのか。なぜ、二、三ヶ月で終戦になるのに、女性までを挺身隊に引っ張っていったのかって、私はくやしくてねえ。金輪際、戦争だけは絶対にやってほしくない。一緒にいた友達四人の死が本当にショックです。今も無念の思いが強く残っています。

私、京都に帰ると親に「よく、お前、帰って来たね」って、「帰って来て、また口が一つ増えたわ」なんて言われちゃいました。子供が多いのに、お前が帰って来たばっかりに、食料難にまた口が増えて、食べ物の確保が大変だと。働こうと思っても働く所がありませんでした。私は死んだ人のショックで本当にもう夜は泣き明かしました。胃潰瘍わずらって、それから家で、ほとんど寝たり起きたりで、栄養失調のようになりました。戦争は酷かったですね。もう考えるのも嫌で。思い出したくもないですよ。戦争だけは少しぐらいやられても、もう手は出さない方がいい。私はもうそれに限ると思います。

第二部（インタビュー・空襲）

戦後も配給で並ぶ

仁科　剛隆

（道路に焼夷弾が）

私は戦時中、両親と姉二人の四人で中野区の江古田に住んでいました。就学前の幼い頃でしたから、鮮明な記憶はありません。近所の家に遊びに行っていまして、百メートルほど離れた家なのですが、帰り道で空襲に遭いました。焼夷弾が"パラパラパラ"と落ちてきましたが、私には運良くあたりませんでした。しかし、たいへん怖い思いをしたという記憶があります。それと、家に防空壕がありまして、飛び込んだという経験もあります。

子供心にも宝物であった、メンコとかビー玉をリュックサックの中に入れて、寝る時に枕元に置き、いつでも持って逃げられるようにしていました。家の近くに、十三軒通りと言う広い通りがありました。そこが滑走路と間違えられて、爆弾攻撃を受けました。近くの水道タンクにも爆弾の傷跡が残っていました。夕方になると灯火管制がひかれ、電灯のまわりに黒い布をつけていました。私の家族は誰も戦争に行きませんでしたが、従兄が学徒動員で出征して戦死しました。外

語大生で大変優秀な方だったらしいです。池袋の空襲の時、空が真赤に染まったことを憶えています。B29の飛来や探照燈の光も記憶に鮮明です。

（さつま芋の周りのお米が先）

終戦になっても食べ物が配給でして、配給の順番とりで、母とか姉と交代で並びました。食べ物はなかったですね。少しばかりのご飯の中にさつま芋を入れて煮込んだもので、さつま芋の周りに付いたお米を、まっ先に食べました。まあ、それも、物資が出回ってからのことでした。配給だけでは足りなかったので、本当は違反ですけど闇屋から食糧を買っていました。

戦争が終わった明くる年、小学校に入りました。低学年の頃の遊びは、川にえびがにを取りにいったり、とんぼを取ったりしていました。家の前に住んでいた方が進駐軍の運転手さんで、アメリカ兵がよく来ていて、ガムとかチョコレートをもらいました。それがうれしくて、よく憶えています。

第二部（インタビュー・空襲）

戦時下の少女時代

野尻　昭子

（疎開の話）

私が、戦争を意識したのはＮＨＫラジオの朝の番組で、「帝国陸海軍は、戦争状態に入れり……」という、臨時ニュースの放送を聞いた時でした。その時はまだ小学生でした。昭和十三年に神明小学校に入学します。戦争は、最初は日本が勝っていましたけど、その後、風向きが変わってきました。日本の領土だった所が、アメリカにとられて、だんだん、戦況が悪くなって、学童疎開が始まったんです。私が、小学校六年の時でした。

その頃友達と、「私たちも卒業で、女学校に行かなきゃいけないけど、戦争はどうなるんだろうね？」って話をしていました。下級生たちは学童疎開へ行き始めていました。東京が危ないから地方へ行く疎開には、地方の親戚や知り合いの家に行く縁故疎開、学校単位で先生が引き連れてお寺などへ行く学童疎開がありました。今思うと親元から引き離されて、親も子もどんな気持ちだったでしょうね。大変な時代になっ

たわけです。

強制疎開で私たちの家がなくなり、母の実家の近くの栃木県の足利に縁故疎開で行きました。何も東京で育った人間が、田舎の方まで行かなくてもと思いました。私の父は、足利の中島飛行場に勤務していました。まあ戦争によるそうした生活の変化で、父も母も大変難儀をしました。先祖代々の位牌は大切なものだからと言うことで、疎開先に持って行き、焼けずに無事でした。

私は疎開先で、県立の女学校に一年生で転入しました。当時は無試験でしたので、県立に入れて得した思いでした。ああ、これで勉強できるかなと思ったら、敵機が疎開先まで来るのです。群馬県の太田に飛行場がありまして、そこを目指して上空をB29や戦闘機が、通過するのです。まさかの思いでしたね。高校では実業と言う授業がありまして、山の多い所でしたからそば畑の開墾をしたり、田んぼで農作業をしました。経験もありませんし、ああ嫌だなあと思いましたけど(笑)、田んぼに入るとヒルがいると言う話を聞かされて嫌でしたね。

その授業の開墾中に、アメリカの偵察機が、低空飛行で飛んで来たんです。昼間は爆弾を落とさないとは聞いていましたけど、恐かったですよ。そば畑は真っ白な花が咲いてきれいでしたね。戦時中で今までの生活には潤いがなかったですからね。くわを持って行くんですけど、そば畑まで行く何里かの道を何回歩いたでしょうかね……。あれでずいぶん鍛えられました(笑)。

食べ物は日本中が苦しんでいる頃でしたけど、お米だけは食べられました。東京にいたら、配給も満足に受けられない時代でしたからね。

(空襲の話)

東京は、ますます空襲が激しくなって来て、夜も寝られない状態になりました。B29が、頻繁に東京湾から飛んで来ます。夜になると、ラジオから「敵機来襲、霞ヶ浦方面からB29が……」と流れ、体制を整えろというわけで寝られません。私の家は八人兄弟で、私が年長でしたので放送があると下の子を起こして、枕もとに用意しておいた防空頭巾を皆にかぶせて、手を引いて暗い夜道を防空壕まで急いだんです。

毎日毎晩となってくると、体も疲れてきて大変でした。でも一億総動員で頑張らなければならないわけです。母も大変で昼間の内に、残ったご飯でおにぎりを作って、夜に備える、毎日そういう暮らしでした。空襲が激しくなりどうしようかと……。芝公園の中に、横穴式防空壕っていうのがありまし

て、軍隊が作ったのかな？　このあたりの人たちは、皆そこへ入りました。中に入ると、このまま通り抜けてしまうのではないかと思うくらい、奥が深いんです。いざという時は、横穴式防空壕に逃げなさいという指示も出まして、町内会ごとに班が作られて、夜でも昼でも、そこに逃げていました。

私の家は金杉橋の近くの川沿いで、当時、芝区土手跡町という町名でした。その町も空襲が激しくなり焼夷弾が落とされたり、爆撃を受けたりました。そして、国から立ち退き命令が出て、強制疎開ということで私の家も壊されました。その後、やはり空襲を受けて大変な被害が出たそうです。爆弾の直撃で、沢山の人が亡くなったと聞いています。爆弾の直撃で足や手が飛んできたり、大変だったと兄から聞きました。ちょっとしたことで、皆死んでいってしまうんですから、生き続けたいという思いでみんな必死でした。

（戦争と青春）

大学生が戦争の訓練をして、神宮外苑で、学徒動員の壮行会をしたんです。皆、旗を持って行進して、戦場に行ったんです。私が子供の時でしたけど、大々的に報道されて、色々な大学から沢山行きました。

千人針って知っていますか？　戦場のお守りとして母親などが、針と糸と布を持って町中を回って一針一針皆にぬってもらって、子供や夫の戦場での安全を願って、出征の時持たせた物です。私はまだ幼かったけれど、私より上の人たちは、もし好きな人がいても、その人に赤紙（召集令状）がくれば、戦争に行かなければいけないわけです。もし行かなければ、もっと大変なことになるわけですからね。若い男の人は、兵役で軍隊に行ってしまい、残されたのは、女性と子供、それからお年寄りでした。

戦場で沢山の方が亡くなり、戦争が終わっても帰ってこない方が沢山いました。悲惨な時代でした。そんな時代もあったんですよ。私は、戦争さえなければ、自分の思うような道に進めたと思うんだけど……。

（終戦の日）

疎開先の足利で女学校の二年生の夏休みの八月十五日、戦争が終わりました。その日を私すごくはっきりと憶えているんです。今日陛下の玉音放送があると言うことを聞きました。夏の暑い日で、蝉がジージー鳴いていました。その蝉の声が、いたたまれないような、悲しそうな鳴き声でした。もちろん、テレビなんかは無い時代ですから、「みんな、集まりなさい」って、小さなラジオの前に座らされました。陛下の声は聞い

たこともありませんから、こういう声なんだと思いながら、聞いていました。それで、女の人たちが泣いているんですよ。「日本が負けた」って。え～ってビックリしました。

それから、町中が少しずつ変わってきて、何かやっと、今までの緊張感から解かれ、安堵感と言うか、気持ちが休まるようになってきました。玉音放送を聞いた時が、終戦と言うことを、一番強く意識した瞬間でしたね。大人の感じ方と、子どもの感じ方はちがうでしょうが、戦時中、戦後と目まぐるしく時代が変わっていった気がします。学童疎開なんて、小さな子どもが親元から引き離されて、苦労をして、ずいぶん辛い日々を過ごしたんだと思いますよ。その中には、親が亡くなられた方もいたでしょうし、私だって、一番楽しいはずの少女時代が戦争でしたものね。広島、長崎も知っていましたので、何時原爆が落とされるのかと思っていた時に、戦争が終わったわけですから、心からホッとしました。戦後、東京に戻りました。

（戦争への思い）

戦争は、人の命を奪うわけですから、絶対にしてはならいということを強く言いたいです。いくら世の中が変わっても、世代が変わっても、戦争だけはしてはいけません。原爆も恐い物だと知っていましたけど、実際に長崎に行って見て、より強く実感しましたね。永井隆博士（旧制長崎医科大学の研究中に被爆、更に、原爆で被爆、夫人は爆死、被爆者でありながら、被爆者救済に奔走、著作多数）のことなどを思うと、この平和が永久に続くことを心から願います。戦争の痛手は一生残りますね。

五月の港区の空襲

八田　利子

（赤坂の空襲）

空襲警報が鳴りまして、皆避難するように言われました。それで、四谷の東宮御所の防空壕に逃げました。そして、時々防空壕の蓋を開けて空を見ていると、アメリカのB29が、編隊を組んで、東京の上空を飛んでいる姿が見えました。私は、防空壕の蓋を開けたりしめたりしながら、見ていました。防空壕は、畳一畳ほどで、道路の脇とかあちこちに掘ってあったんです。東宮御所の防空壕は、鉄格子の塀の終わった辺りに、ありました。塀のハジハジにありまして、木の蓋を持ち上げて入り避難するんです。

当時私は、赤坂見附の前田外科病院の側のアパートに住んでおりまして、一つ木通りの女子挺身隊で無線機を作っていました。沖電気の無線機で、ハンダ付けの作業でした。何時間か防空壕に入っていまして、空襲警報が解除になりまして、外に出てアパートまで帰りますと、アパートは焼けてしまってありません。仕方なく、弁慶橋まで歩くと、お堀には、死体が沢山浮かんでいました。人ばかりではなく、犬の死骸等で、お堀は埋まっていたと言った方が、いいのかもしれません。赤坂見附の駅の向かい側は、今はホテルですけど、後楽という中華料理の料亭で、長いコンクリートの塀がありました。その塀に、爆風で打ち付けられた、人間の死体が、どう言ったらいいのか、打ち付けられて死んでいたのです。

（歩いて赤羽へ）

実家が赤羽にありましたから、線路を伝って歩けば赤羽につけると思いまして、リュックを背負って、東京駅まで歩いて行きました。その時、同じアパートの方で、海軍に食糧を収めていた方が、危ないからと赤羽まで、送ってくれたんです。電車は走っていませんから、当てずっぽうに歩いていました。歩いていて周りを見渡すと、東京は平らでした。みーんな焼けて何も無いわけです。思い出したくないですね。今の人は、写真を見るくらいで、想像も出来ないでしょうけどね。赤羽の実家は、駅の直ぐ側でしたので、近くまで来て、家のほうへ線路を歩いて行きますと、父が、何十メートルか先にいまして、自転車でも掃除してたのか、持っていた雑巾をボタッと落としまして、「おお、利子」って言いました。私のことで頭が一杯だったんでしょうね。当時はラジオもありましたし、空襲のことは、知っていたと思います。ですので、生きているのか死んでいるのか、歩いて来ましたから、本当に心配していたんでしょうね。

（北海道へ終戦）

その後、赤羽に送ってくれた方の進めもあって、その方の実家のある、北海道の札幌に行きました。汽車と船を乗り継いでの、長い旅でした。玉音放送は、札幌で聞きました。直立不動で聞きましたが、あぁ、これで日本もおしまいかと思いました。縁あって、その後その方と結婚しました。彼の実家は、大豆を加工して食糧にして、海軍に収めている工場をやっていましたから、札幌では食料には困りませんでした。その夫も亡くなって十年近く経ちますと、最近、戦争・戦後のことを思い出しますけど、本当は思い出したくもありません。あんな悲惨なことは、……今は東京もこんなになっていますけど、焼け野原でした。残ったのは、議事堂と皇居と御所等ですけど、港区などは、木造建築が多かったので、直ぐ燃えると思ったんでしょうね。日本は、そうすると白旗を揚げると思ったけど、駄目だったので、広島、長崎に原爆を落とされて、終戦をむかえたわけです。

八田さん本人

第二部（インタビュー・空襲）

三中での東京大空襲

平澤　俊夫

（東京大空襲の思い出）

私は、昭和三年、東京の港区高輪で生まれました。中学が当時の東京府立（当時は東京府）三中で、五年制でした。戦争が始まったのを知ったのは、通学のために、高輪から錦糸町まで行き学校の朝礼に出た時のことです。十二月八日、この日は、学期末試験の初日だったので、よく覚えています。朝礼で、校長先生が、アメリカと戦争が始まったことを、皆に伝えました。当時は、まだ中学生ですから、はっきりしたことは解りませんでしたけど、周りの雰囲気は、高学年になったら進路を決める時、皆が軍隊というのがありましたから、あー来たかと思いました。五体満足であれば、半分ぐらいは、海兵、陸士へ志願したわけでしたから。

その三中時代に、東京大空襲を体験しました。三月十日と言われていますが、実際には、三月九日から来襲は始まっていました。私は、兵隊へ志願しても、近眼で行けなかったので、亀戸のガス化学工場に、学徒動員で行っていた時のことです。高輪から亀戸まで通勤していまして、空襲の始まる六

時間前までは、工場にいました。私が帰宅してから、大空襲が始まって、工場はもちろん、あの辺一帯は、メチャメチャにやられました。

私のクラスも、四人が行方不明となりました。私たちは、友達を捜しましたけど、二人は、死体も見つかっていません。死体の集められた荒川の土手で、最初の班がそれらしい死体を見つけたんですけど、どうも違うと言うことで、帰ってきてしまいました。水死らしくて死体が膨らんで、太って見えたんですね。アイツはこんなに、太っていないと思ったらしいです。そして、第二班の友達が、機転がきいて、ポケットを調べたんです。そしたら、定期と生徒の身分証明書が出て来ました。それで本人だということが、判ったわけです。ところが、死体は判っても、家族が判らない、お葬式をやるわけにもいかない。火葬場もありません。取りあえずは、そのままにして置くしかないわけです。彼は、四月から兵隊に行く予定だったんです。あとの三人のうち二人は、深川の方へ逃げたということだけが判っただけです。その後は判りません。もう一人は、本人の名前を刻った鉄兜が見つかって、確認出来ただけです。死体は見つからず、鉄兜だけが残されたんです。

(港区での東京大空襲)

東京大空襲の夜、私は、港区の自宅に居りました。空襲が始まると、対空砲火が沈黙して撃たれる心配が無いので、アメリカ軍の飛行機は、おもいきり降りて来ていました。機体は、空襲の赤い火が反射して、銀色が、赤く光っていたのを思い出します。あの日は寒い日で、防火用水が凍っていました。氷は、とび口（火事の時に使う、家を壊す道具）で壊しても、またすぐ凍るんです。そして、風も強く、下町は特に強かったみたいです。

(港区の空襲)

五月二十五日の空襲も大変でした。私の家の前も被災しました。家のそばにも焼夷弾が落ちたんですけど、低空で落としたやつは、開かない物もあります。焼夷弾というのは、色々なものがあるらしいんですけど、三十六個の爆弾を巻いて一つにしたもので、巻いたベルトが空中で切れて広い範囲に散らばります。空中でベルトが切れない程のその威力は凄いものがあります。私は、三十メートル先の倉庫が、凄い音で火柱をあげて、裂けたのを見ました。焼夷弾は、初めてでしたけど、亀戸の工場では、爆弾を体験しています。爆弾が落ちてくる音は、丁度、ガード下で電車が来る時と似ています。ゴーっという音と共に落ちてくるんです。亀戸は、掘ると水が出ますんで、防空壕が掘れないんです。ですから、待避壕の中で耳を押さえて待っているんです。凄い音ですね。

ドンと言う音と共に体が跳ね上がると、あー助かったと思うんです。何処かというと近くに爆発したわけですから。亀戸は、東京西部を爆撃した後に、帰りに残った爆弾を落とされました。それで、千葉の銚子方面へ帰って行きました。

私の家は、家族全員無事でした。家の前のお宅は、火が出ましたが、皆で消火をしました。熱いんですよね、顔はすすけて真っ黒です。実際には、バケツリレーなんか役に立たないですね。

（終戦の思い出）

玉音放送（天皇の終戦のお言葉）は家で聞きました。でも、父親からだと思うんですが、前の日に、戦争が終わることを聞いていたと思います。何故なのかは判りません。終戦になってすぐ考えたことは、これでぐっすり眠れると思ったことです。それから、直ぐに自由になれるとは思わず、又、満州か何処かに、勤労部員ということで送られるのではないかなど、不安でした。それから、大学に入って、戦後と言うことになったわけです。

第二部（インタビュー・空襲）

麹町での空襲

藤島　喜代子

（戦時下での結婚）

私は、京都の旧家の出身でしたが進学のために上京し、昭和十九年の三月に卒業、戸籍をかえないと微用といって女性でも工場で働かされるのです。それで親戚の世継ぎで四月に十九才で結婚しました。新居は千代田区麹町で、結婚式は飯田橋大神宮でした。夫は日本光学の双眼鏡などを作る専門の技術者でしたので、兵隊には行かずに済みました。私たち新婚さんだけが東京で、当時十代ですからね、何にも分からない。言葉も違うし、表にもあまり出ないで家から送ってくるものだけで隠遁生活みたいな暮らしをしていました。そのうち空襲ですよ。東京の空襲の最中に子供が出来たのです。戦時下ですよ。昭和二十年の三月に焼けて直ぐに、気持ち悪いと思いましたらつわりで、妊娠していました。暮らしも大変なめちゃめちゃな時にもう恥ずかしいですね（笑）。空襲の最中も我慢して必死で逃げていました。あるとき逃げる際に大事なものをひとつ取りに行かしてくださいって家に取りに行

き、戻ったまま帰って来ないというので、消防団の人が見に来てくださったの。バンバンバンと顔を叩かれてびっくりしました。「煙に巻かれて、あんた焼け死にますよ」と言われました。食糧もまともに無い時代でしたね……（涙声）。

（空襲体験）

昭和十九年の九月くらいから、うわ～うわ～と警報が鳴り空襲が始まりました。始めは飛行機も少なく焼夷弾もそれ程でもありませんでした。日本の反撃は敵の飛行機には効果なく何だろうと思っていました。翌年の三月からの空襲は、更に激しくなってB29からの焼夷弾が、うちのそばにも落ちてきました。広い庭の燈籠の後ろにいると、ろうそくの火みたいなのが空中でパアーと明るくなりなんだろうと思っていたら、あれが焼夷弾だということでした。家の中に入ったら、焼夷弾が落ちていてボッコボッコと燃え始めたのです。もう金魚みたいにパクパクしているだけで、声が出ないんです。当時非国民だと言うので、荷物を疎開させていませんでしたので、家とともに全部焼いてしまいました。結婚する時に持ってきていた地下足袋とモンペと頭巾、頭巾には、焼けないように水をかぶせたその姿で市ヶ谷の土手をさまよいながら歩いていたんです。その時足がベタベタとして、なんだろうと思うと、地下足袋ってゴムでしょう、熱でゴムも溶けて、アスファルトのコールタールも溶けるからベタベタなんです。そういう経験をしましたね。それがものすごく印象に残っています。火の粉でまつげ、まゆげ、目も焼けてひどいものでした。

それから配給があるんですけど、お大根の葉っぱが付いてないんですよ。これぐらいですよ、（ボールペンを出して示す）長さ五センチメートルほどでした。それが三日分。大根の芯、葉っぱがついてないもの、それが四本ぐらいくださったかな、それが二人で三日分の配給です。本当に驚きました。それも一回あれば良い方で、その後全然配給なんかないんです。水道もガス・電気も制限でした。始めは実家からお米を書籍として送ってくれました。もちろん、お米は統制品ですから、お米としては郵送できません。その後は、栗とお味噌・梅干しが一回来ました。そして、鉄道の方の輸送ももうだめだという、そういうお手紙を最終的にもらったのです。

（戦後体験）

主人と二人で、京都の実家に里帰りしました。その時、東海道線の静岡駅あたりでアメリカ軍の飛行機から機銃攻撃があって、汽車の下にもぐり一命をいただきました。畑の中に

逃げた人は殺された人も多くいました。ぼろぼろの地下足袋をはいて帰りまして、防空頭巾もぼろぼろでした。お金もなく、焦土です。お土産がなにも無いものですから、持って帰ったものが一つあるんですよ。不発弾の焼夷弾を持って帰りました。うすみどりの紐のついた六角形の四角い筒でした。両親はびっくり仰天していました。でも持っていれば危ないので爆発させていいかって言うので「どうぞ」と申しましたので、爆発させたそうです。昭和二十一年に東京の港区新橋に家を建てたので帰ってきました。夫は平成十二年に亡くなりましたが三人の子供に恵まれました。戦争は大反対です。

毎日新聞

第二部（インタビュー・空襲）

秋田での戦争体験

古村　道夫

（衣料は、貴重品）

秋田に生まれ育って、終戦はちょうど小学校四年だと思います。家は呉服屋で、衣料品がない時代でしたから、農家の食糧と衣料品との交換で、割合恵まれていました。特に苦労は感じませんでした。

白米も食べたけれど、誰かが家を訪ねてくると、それを下に置いて麦飯を出していたりしました。衣料品は配給ですから、特に手拭いとかを欲しがりましたね。売れ残りの呉服や衣料と、砂糖などの食糧品を交換してね。終戦前から戦後、ずっと食いつないでいました。

思い出すのは、演習で兵隊さんの部隊が来ると、各家庭に分宿することがありました。私の家は広かったので、三人くらい宿泊しました。秋田名物のきりたんぽを食べさせたり、地酒をご馳走したりすると喜んでくれましたね。私は島根県出身だとか田舎の話をして、親父やお袋は、遠い所へ旅行なんて行きませんから、夜遅くまで珍しい話を聞き喜んでいました。だけど、そんな話をしていた人も、次の朝出る時には、

庭先に立て掛けた鉄砲をバッと持って、敬礼をしてこれから戦争に行くのかなって感じで、やっぱり戦争って恐い、大変だなと思いました。みんな一人ひとりはおとなしくて純朴な人たちなんですよ、そんな思い出があります。

（小学生の戦争の記憶）

小さい頃、父親が庭に、防空壕を掘っていた記憶があります。空襲警報が鳴ると、B29とかグラマンとか来て、飛んで行くわけですよ。そうすると、日本軍が、高射砲をパンパンと撃つのです。線香花火みたいで、届かないのをよく見ていました。面白いなと思って、見ていたんです。全然戦争という感じはなかったですよね。

疎開している頃、ズシーン、ズシーンと一晩中、地震みたいな地響きを体験してるんですよ。それは、子どもだからよくわからなかったけど、釜石製鉄所（岩手県の大きな製鉄所）への艦砲射撃だったのです。秋田の山奥まで、地鳴りが聞こえたらしくて、凄いものだなと思いました。

（終戦前日、アメリカ軍最後の空襲）

ちょうど、お盆で疎開していた人達は皆、家へ帰っていたんですよ。その帰った日に、空襲にあったんです。秋田には、日本石油秋田製油所（一九一〇年創業、現新日本石油加工秋田事業所）の大きなタンクがありました。その当時、秋田は石油がどんどん出る所でした。そこをねらって爆撃（八月十四日夜半の土崎港の空襲）されたんですよ。私はいなかったですが、田んぼに二十メートルくらいの大きな穴があちこちにあいてね。石油が漏れて、蒸発して雨になって落ちて来ました。それで十日間ぐらい真っ黒い雨が降って、それは雨ではなくて油なんですよ。洗濯もできず大変だったそうです。兵隊さんが亡くなったり、民間人も亡くなったり、今でも慰霊祭（百人くらいの犠牲者）をやっているようです。あと私が覚えているのは、小学校の頃、兵隊さんの慰問に行った覚えがあるんですよ。小学生の合唱ですよね。ＮＨＫで放送して終わってから、お菓子とか飴玉とか手のひらに砂糖をもらったんですよ（笑）。あのやさしかった兵隊さんたちがね、八月十四日と十五日に何人か死んでいったのかと思ってね。今でも、お盆には思い出しますよ。空襲の日の朝が終戦ですから、あとで町の人たちが、戦争は終わったのにアメリカが爆撃したと随分言っていたのを聞きましたね。真実は私には分からないです。

集団疎開の思い出から、三月・五月の空襲

細田　卓司

戦時中は現在の浜松町二丁目（当時は四丁目）に住んでいました。祖父母は大正時代当地でチョンマゲを結ってうどん屋をしていたので「チョンマゲうどん屋」としてちょっと有名だったようです。太平洋戦争も昭和十七年六月、暗号解読されミッドウェイ海戦の敗北、翌年五月アッツ島玉砕、キスカ島撤退、その間ラバウル方面で戦線視察中、山本五十六元師の戦死等あり、日本政府は空襲必至と見て小学校四、五、六年生、未来の特攻予備軍、軍国少年少女の私たち数百名は昭和十九年八月二十二日天気快晴、東武線浅草駅より出発、栃木県塩谷郡藤原町鬼怒川温泉へ集団疎開しました。私は六年生でした。当時、港区は芝区、麻布区、赤坂区の三区でした。浜松町、新橋付近の生徒は鬼怒川温泉へ、他区の生徒も川治温泉、塩原温泉に集団疎開したようです。神明小の生徒は一心館ホテル、東亜荘、福松旅館、花の家の四つの旅館に分宿、私は一心館ホテルでした。到着日は嵐の直後で一週間くらい危ないからということで外出禁止、でもその後がとても面白かった。栗ごはんにするので栗拾いは特に楽しかった。九月に入って宿の近く小佐越の畠で学童が何十人と横一直線に並び、食料のイナゴ取りは実に壮観でイナゴの大群が羽音高く飛び上がるのを一生懸命で追いかけた。

十九年九月十七日第一回目の面会日（父親は戦地で不在のため、母親が多かった）でした。これがまたとてつもなく嬉しいもので、現在のようにデパートやスーパーにおいしいお菓子があふれている時代ではないが、それでもそれぞれの親たちは精一杯の努力で乾そう芋や大豆、いりゴマ、みかんや、干し柿、蒸したさつまいも、ジャガイモ、かぼちゃやその他のお菓子等、親たちの持参したものを友達同士あげたり、もらったり分け合って食べた。面会の都度たのしかったなア……。集団疎開で体験したことはとてもよい勉強になった。地元の人たちとの運動会、騎馬戦や棒倒し、園芸会もあったし米山校長先生、福原教頭先生、我々の担任の岸田芳郎先生や他の先生方もゲートル巻いてよく来てくださいました。大晦日イブの昭和十九年十二月三十日、あんころ餅が出た。教頭先生が「どうだ、たまにはこういう物もうまいだろう」とか言って皆で大笑いしていただきました。うまかったなア……。又ある時先生がおかずにして食べろと、バターを支給され、ご飯にバターをのせてお醤油をかけて食べました。今でもそ

の癖が抜けません（笑）。卵なんてない時代です。

その中で唯一、温泉だけは不自由しませんでした。当時はまちがいなし源泉百パーセント。掛け流しの温泉です。よく入りました。そのあとうがいをして冷たい水を飲めば身体によく、かぜも引かずにすんだというものでしょう。それで七十四歳になった現在も中高年の人たち十数人を集めて山の中の源泉温泉やハイキング、お花見等、趣味の会を作って楽しんでます。

団体生活は掃除の仕方、整理整頓、物を大切にすることとはどういうことかなど、よい経験になった。我々六年生、色々な思い出をたくさん胸にしまい半年間の集団疎開生活鬼怒川温泉をあとに昭和二十年二月二十七日、受験のため自分の誕生日に東京に戻った。日本は当時電波探知機（今のレーダー）が遅れているということで昭和二十年三月芝浦工業の電気科を受験して合格した。入学後、学校へ行くと校門に先生がいて「今警戒警報が発令されたから帰れ」と言う。そんな日々の繰り返しだった。授業は、焼跡の片付け、小銃の弾拾い、軍事教練が主だったので軍隊ではないけれど往復ビンタや対抗ビンタがよくあった。

●三月九日の東京下町大空襲（奉天大会戦の復警戦かな？）。浜松町四丁目の道路で見ていると、下町方面の空がもう真っ赤、夕日の真っ赤と同じで上空はオレンジ色であり油も一緒に燃えるのでどす黒い色、燃えるときは色々な物が混じり、朱色の印鑑の赤に近い色だった。B29に高射砲弾が当たると、分解してバラバラになって落下するのもあり、火達磨になって東京湾の方面に逃げるもの、真っ赤に燃えながら火の玉になってぐるぐる旋回だけしているのもいた。高射砲で被弾し撃墜したB29を十三機見た。戦後五十数年を経て本で調べたら間違いなかった。もしもこの時日本軍にVT信管があったらB29三百機の中、半分の百五十機位は撃墜できたと思うし十万人の死者もずっと少なくてすんだでしょう。——アメリカ軍はすでにVT信管を開発していた。マリアナ沖海戦地で使用、為に日本軍機三百機以上が撃墜された。米軍はこれをマリアナ沖の七面鳥狩りと言っていた。わかりやすく言えば地対空ミサイルだと思えば理解できる——日本海方面もたまには天気晴朗なれど波高し、そなえあれば憂いなしというところでしょう。

その後、四月頃金杉橋から将監橋にかけて敵機は時限爆弾を投下した。この爆弾はすぐ爆発せず、十分から二十分くらいして爆発するため、浜松町四丁目の私たちは防空壕の中で「今の爆弾は田町かな？　品川かな？」などと話していた。時間がたって、防空壕から出てまずビックリ、眼の前でした。

金杉橋の交番の前、川の両側に爆弾が落ちたのだ。川の右側の家はガラスは吹き飛び爆風のため天井は吹き飛ばされて、道路から見ても屋根の裏側まで見えた。爆弾が落ちたところは、直径十メートルくらいのお碗型の穴がポッカリあいていた。川の左側は防空壕があり、そこに直撃弾が当たり亡くなった方々が泥に埋まり、飛散し肉片となった。肉親男性の方が泣きながら泥をほりかえし亡骸を探していた。金杉橋の上からは大勢の人たちが見物していたので、その男性の方は泣きながら眺めている人たちに「見世物じゃないんだ」と怒って泣きじゃくっていた（合掌）。

●五月二十五日浜松町、新橋、芝公園、麻布他広範囲にわたり空襲を受けた。（日本海大海戦の仕返しかな?）夜中B29は、焼夷弾攻撃だった。焼夷弾には三種類あり黄燐、エレクトロン、油脂（油脂はベトナムやイラクで使われているナパーム弾の前身のような物）が突然汐留方面にばらまかれ焼夷弾が落下。何百本のドラム缶が空から降ってきたみたいでその音は遠雷百雷の音、実にすさまじい音だった。十分後はボタン雪のような大きな火の粉がバンバン降ってきた。風上も風下もない。何百、何千軒という家が一晩で燃えてしまうんだから、母親は赤ちゃんを背に、子供の手を強く握り、老若男女皆防空頭巾をかぶり、荷物を背に黙々と一言も発せず芝離宮へ逃げた。その時私の家族は兄は軍隊で浜松に、弟は集団疎開で鬼怒川にいたので、家族三人私は芝離宮へ、母と姉は金杉橋方面へ逃げて無事だった。ＪＲ浜松町駅の線路や、芝離宮には一発の直撃弾もなかったので、死傷者は少なかったようだ。アメリカ軍も三月九日下町の空襲とドイツのドレスデンの空襲で死者のあまりの多さにびっくり仰天して、焼夷弾や爆弾投下の位置を考えて落としたと今でも思っている。ドイツはすでに降伏、さすれば日本も間もなくと思えば日本進駐後、困ることも多々 あると考えたのだろう。又、昭和十七、八年頃、私の家で愛宕警察の警察犬シェパードで「ハチ」という犬を預かっていたので芝大神宮様の先、警察の寮までバケツを持って犬の食事の残飯をもらいに行ったが、「ハチ」は大空襲の後はどういう一生を送ったかなと思うこともある。私の家はこの日まで大家をしていた。浜松町と三田四国町と渋谷の道玄坂の三か所に何軒かずつ貸家があったので焼けなければそこの家に行って住もうと思い調べたら、三か所ともこの夜の空襲で全部燃えてしまったので、神明小学校の廊下に寝たり防空壕に寝たり一時的に間借りしたりの生活でした。特に防空壕に住んだ時、夜半トイレに行く時の薄気味の悪かったこと、外は真っ暗闇外灯一つない、都電の電線があちこちでぶらさがり線路にたくさんたれ下がり、焼けたトタンが

風でパタパタ音をたてていた。

さて、空襲が去って翌朝浜松町駅の線路に立って見たら、きれいさっぱり一面の焼け野原。残っているのは風呂屋の煙突と質屋のお蔵と焼け残った小さなビルくらいだけだった。印象に残っているのは、芝公園の五重の塔がまだ真っ赤な炎を上げながら盛んに燃えていたのと芝園橋にある友愛病院の二階の窓から真横に火炎がゴウゴウと吹き出していた。

敗戦後の今日、巷には各種物資が山積みされてなんでもある時代だが、物や心、種々大切な事柄が沢山あります。それらを大事にしよう。また、物事我慢するということが大切だということをつくづく感じる今日この頃でございます。

学童疎開

学童疎開

第二部（インタビュー・空襲）

焼夷弾が雨の様に

堀　利晃

（勤労奉仕と配給）

私は昭和十九年十一月、勤労奉仕で江東区豊洲にある、石川島の造船所に行きました。囚人の人や朝鮮の人たちと一緒に働いていました。軍の船が故障してドッグに入って来て、それを修理し、戦場に送り出す仕事でした。三月十日の東京大空襲で、石川島の造船所が焼けました。造船所の技術者や指導員などの専門家は、寮に入っている人もいましたのでけっこう亡くなったと思います。逃げ場がなくみんな海に行くしかないわけですから。昭和二十年一月昼間、銀座が空襲にあって、銀座四丁目の服部時計店の裏に爆弾が落ちました。地下鉄に逃げ込んだ一般の人たちもいましたが。そこが直撃されて多数の死者が出ました。また、有楽町駅も直爆撃で全滅しました。

配給はひどいものでした。弁当をパッと開けると小さなさつま芋三個。そういう状態ですよ。それがお昼だもの、ひどいものですよ。今日は朝から雑炊の配給があるというと皆が鍋とか、どんぶりを持って行くわけです。並んで、ひしゃく

に一杯ずつもらって、雑炊と言ってもお米の少ないお粥ですね。石川島での配給も乾燥バナナや白米ではなくこうりゃん、赤い飯ですよ。冬だったから寒くてね、冬でも、着の身着のままでしたよ。

毎日新聞

第二部（インタビュー・空襲）

戦中・戦後のお話

牧石　幸栄

（子供の頃のお話）

住んでいたのは宮下町で、父は大正三年から米屋を始めました。更科と言うお蕎麦屋さんは、最初永坂にありました。初午（はつうま・二月初めの午の日に開催されるお稲荷さんの祭礼）になると、近所の子どもたちが集まるんです。そうするとお蕎麦屋さんの方が、十銭ずつ子供たちに配ってくれ、その貰ったお金を持って山の上のお稲荷さんをまつった神社に出るお店に行き、お好み焼きだとかを買いました。私たちの子供時代の楽しみの一つでしたね（笑）。あの辺はお屋敷街で、区役所の前を通って永坂へ抜けると洋館の立派なお屋敷がありました。今のフィリピン大使館ですかね。そして鳥居坂を登っていくと今度は、三菱関係の岩崎小弥太さんの立派なお屋敷。自分たちが住んでいる所は反対側で、子どもが何か欲しいと言いますと、「あそこの家へ行って、お金貰ってこいよ」という話をしていましたね（笑）。どんな人だかは、見たことはありませんでしたけど。あの頃は空襲も何もない平

穏な世の中でした。

私が区役所に入って、戦争がちょっと激しくなった頃、六本木の防衛庁のあたりに部隊が駐屯していまして、出征の時に六本木から下ってきますと私の家の前を通るんです。兵隊さんが出発するのは、行動を秘密にする目的があったのか、決まって夜中でした。夜中に発って品川の駅から戦地に向かうんです。ざくざくという音が枕元に聞こえてくるわけです。戦地に行くんだなあと思って、見送りに出ることもありました。中には見送っていますと、メモ用紙を手渡す兵隊さんがいました。メモ用紙には、「すみません、電話かけて下さい」と書いてあり電話番号が載っていました。電話のあまりない時代でしたけど、家には商売の関係で電話がありましたから、家族の方に連絡してあげました。「今、家の前を通り、品川駅から発ちますから、行けたら品川駅に行ってやって下さい」ってね。軍の秘密行動は、家族にも秘密の時代でした。

平時の時でも、富士の演習場に行っての帰りなど、必ず家の前で休んでいました。見ていると兵隊さんがね、自分のことより先に馬の手入れを先にやるんですね。そして、「水下さい」って言うのです。その姿を見まして、あの時はなぜか感動しましたね。ちょっと見られないものですから。

私が勤めた麻布区役所は、兵隊に行く人が多かったものですから、年配の男の人と女子の職員しかいませんでしたね。戸籍の課長、兵事係係長と係員は四人か五人しかいませんでしたから、仕事は忙しかったですよ。当時、徴兵検査は本籍のある所で受けるものでしたから、軍関係の色々な書類や通知がたくさん届きました。今の防衛庁跡地にいた部隊の名前が変わった時などは、混乱しましたね。取り扱う偉い人の名前や、部隊名だけの物は、対応に苦労しましたね。戸籍謄本は、みんな手書きの時代です。戦死すればすぐ必要ですし、それに家族の多い時代ですから、とても忙しかったです。戦時中は、区役所にも女子挺身隊の動員で、お手伝いの女性が来ました。家の近所のお友達も、二人ばかり来ましたよ。挺身隊で、何処に連れて行かれるか分からないから区役所の方に頼んで、入れてもらったということもありました。

（空襲のお話）

四月十五日の空襲だったかなあ、親戚の人から「今晩はもしかしたら空襲で焼けるから、空襲になったらすぐ逃げなよね」って電話がありまして実際空襲になりました。歩いて六本木の方まで行って、青山一丁目まで行ったのかなあ、それで夜が明けてから自分の家の前に戻ると「ああ、焼けちゃった」と言いましたら、消防署の人が「しょうがないだろ、空

襲で焼けちゃったんだから」と言われたわけです。「そんなこと言ったってね、自分の家が焼ければ悔しいわよ」と、そうやって泣きながら話しましたね。だから空襲はもう、二度と嫌です。

あの頃はね、疎開で空いた家が多かったんですよ。けっこう大きな家でも戦争が激しくなるからって、地方へ疎開して空家になっていました。私たちは役所の人に「本村町の家が空いていますから、一時入れて下さい」とお願いしまして、本村町から区役所へ通っていました。そこに何ヶ月かいて、うちの父親の親戚が神谷町で米屋を営み、森本町にもアパートを一軒持っていましたのでアパートに入れてもらいました。それから、主人と結婚して、富士見町の疎開して空家になっていた家に、引っ越したんです。転々としましたね。

そして、五月二十五日の港区の大空襲でしょ。両親と一緒に逃げましたけど、途中ではぐれまして朝になって、元の家の前まで行ってみたら、麻布周辺はほぼ全滅でした。六本木あたりも空襲で焼けました。区役所で係長か誰かから、「表参道へ、空襲で亡くなった人の死体を見に行って来い」って言われましたが、私「それだけは勘弁して下さい」って行きませんでした。表参道の、昔の富士銀行のあったあたりに、空襲で焼けた人の死体をみんな運んで置いてあったらしいんですよね、私は「悪いですけれど、それだけは見せないで下さい」って頼んで行きませんでした。暮らしは、食べるのが精一杯で、衣類もみんな焼けてしまいました。

港区史